青山 信一郎 －松島湾で殉職した青年教師－

那珂市歴史民俗資料館

昭和５年（1930）２月２７日、父青山信夫、母知恵の長男として那珂郡芳野村（現那珂市）飯田に誕生した。両親とも教職にあって、信一郎が教師となる素地は十分に備わっていた。また、青山家の遠祖六衛門貞栄は飯田村庄屋役を務め、慶安４年（1651）には新田開発を願い出て許可され、嫡子（ちゃくし）六衛門栄昌の代とも合わせて４４７石余りを開発し、農家も１００余軒増加するほどの功績をあげた。これによって、藩から褒賞されたほどの旧家でもあった。

信一郎は、両親の勤務の関係から夏海（なつみ）小学校（大洗町）、五台小学校（那珂市）で学んだ後、昭和１７年に水戸中学校（現水戸一高）に入学、昭和２２年には東京高等師範学校（東京教育大学・現筑波大学）の理科第３部に進学して動物学を専攻し、海中生物の研究に励んだ。昭和２６年、宮城県から請われて県立塩釜女子高等学校に赴任した。海洋生物の研究には最適の地であった。

信一郎は中学時代から丹念に日記をつけた。その後も克明に随筆風の手記や追想録を綴っている。水戸中学時代、終戦を受けて「失敗は少しも不名誉なことではない。更に豊富な知識で再び事を始めるべき好機である。失敗を恐るるこそ、むしろその人の恥辱である」。また、高等師範学校時代には、「どんな広遠な、清純な思想に基づくものにせよ、暴力、戦争の惨禍は罪なき大衆に与えるべきでない」などと書き残している。

塩釜女子高時代、真面目で温和な青山教諭は、同僚や生徒からも高い信頼を得た。専門の「生物」の授業、図絵を交えながらの整然とした板書といかなる質問にも具体例を引き親切に答えながら進める講義は定評があった。生物クラブ顧問として、赴任早々学校周辺での採集を始め、夏休みには松島湾で臨海実習。採集と観察、研究と記録の手引きに基づく実習により、生徒たちは採集の喜びと生命の不思議を発見する。新たな驚きの体験であった。研究成果は、日本生物学会東北大会で発表され、好評を博した。

就任２年目の昭和２７年７月２２日、青山教諭は他の教員１名と生徒１７名とで松島湾に面した浦戸の寒風沢（さぶさわ）に合宿し、海藻・小動物採集の臨海実習に入った。翌２３日の午前９時過ぎ、干潮時間となった海岸には、うに・なまこ・ほやをはじめ貝類・海藻が現れた。喜んだ生徒たちは採集活動に熱中した。ところが、そのうちの２名が突然深みにはまった。１名は必死に水をかき自力で浮かび上がった。青山教諭は、他の１名を救おうと敢然と飛び込んだ。しかし共に没したまま。二人は間もなく引き揚げられ、必死の人工呼吸が続けられたが、その甲斐もなく二人は絶命。青山教諭は、若干２２歳での殉職であった。

７月２５日の学校葬の後、学校・生徒・ＰＴＡの間で殉職の碑が話題となり、やがて宮城県下の教育委員会や小中高校・ＰＴＡなどが協力一致する顕彰運動となった。１０月３０日、殉職地にて追悼式・頌徳碑除幕式が行われた。題字「頌徳」は宮城音五郎宮城県知事の筆、撰文は大場三郎塩釜高等学校長である。式では頌徳記念歌も合唱された。翌２８年には、顕彰記念事業の一つとして遺稿集『潮音』が刊行された。